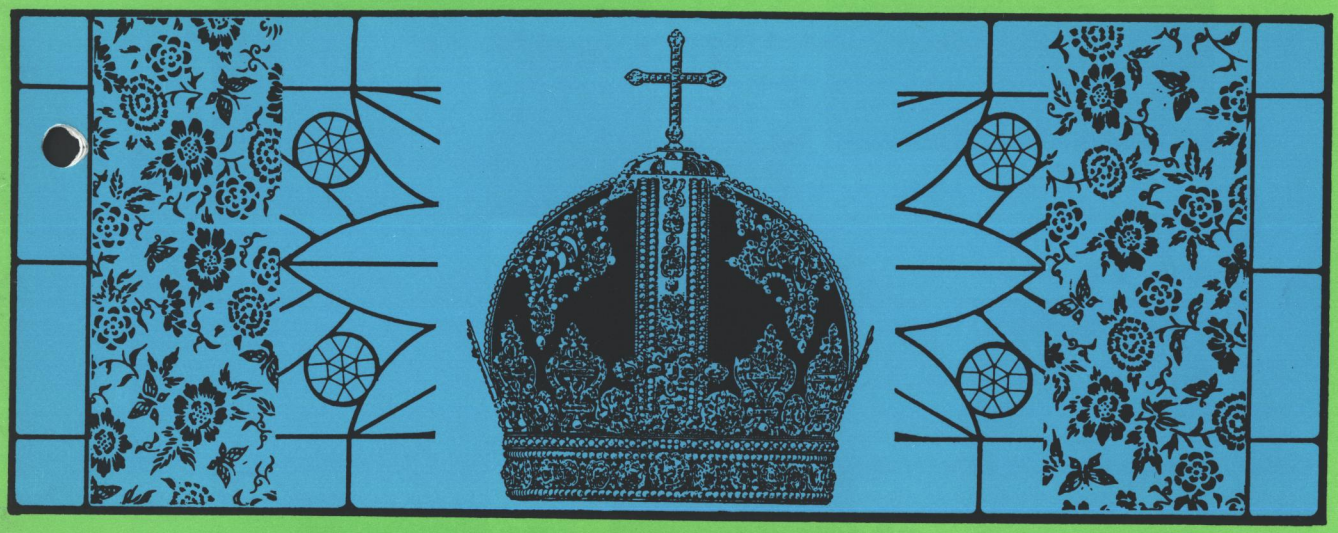
創立70周年

国立音楽大学創立70周年記念事業

第37回
国立音楽大学ブラスオルケスター定期演奏会



'96. 7月7日(日) P.M.2:00
東京芸術劇場大ホール

主　催＝国立音楽大学

ご　挨　拶

国立音楽大学学長
吉田泰輔

本学のブラス・オルケスターの歴史に今年もまた新たな一ページが加えられることになりました。そしてそのページには、私たち国立音大がその時々の激しい時代の波に洗われながら、七十年の歳月を力強く生き抜いてきたこと、そしてそのことへの祝意を込めて、ブラス・アンサンブルの世界の高峰である〈ギャルド〉を永年にわたって率いてこられたブートゥリ先生を指揮者としてお招きするという、二重の喜びが含まれているのです。私たちは、この稀な機会に巡り会うことができた幸せを噛みしめると同時に、刻々と移って行く音楽文化の今を見つめ、遠く未来へと目を遣ることで、ブラス・オルケスターの益々の充実と発展に何が必要かを考えてみたいと思います。

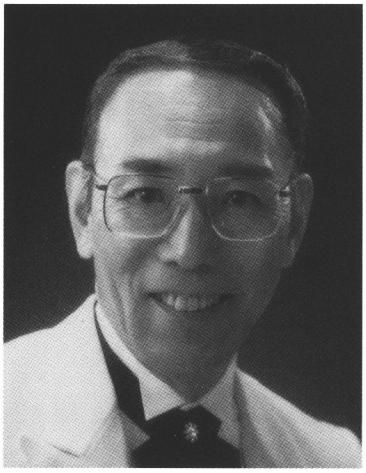
1996年7月吉日

国立音楽大学
ブラスオルケスター
第37回 定期演奏会

客演指揮　ロジェ・ブートゥリ
指　揮　大　阪　泰　久
ファゴット独奏　馬　込　　勇
プレトーク　吉　成　　順
合唱指揮　佐　藤　公　孝

演　奏　国立音楽大学
　　ブラスオルケスター
合　唱　国立音楽大学合唱団

指　揮　大　阪　泰　久



客演指揮　ロジェ・ブートゥリ

1932年パリ生まれ。パリ音楽院で学び、ソルフェージュ、ピアノ、室内楽、和声、対位法及びフーガ、伴奏、作曲、指揮の各科においてプルミエ・プリ（1等賞）を得る。

62年にはパリ音楽院和声科の教授に就任、以後教育者としても国際的に名を知られるようになる。63年にはパリ市音楽大賞、67年にフランス学士院よりジョルジュ・ビゼー賞など多くの賞を受賞。

また、ピアニストとしてもチャイコフスキー・コンクールでの入賞歴があり、モントゥー、クリュイタンス、マルケヴィッチ、クーベリック等の指揮でオーケストラとの共演も多い。

73年にパリ・ギャルド吹奏楽団の第9代楽長に就任し、74年、シャルル・クロ・アカデミーよりグランプリが贈られた。88年、フランス最高の勲章であるレジオン・ドヌールを授与された他、89年12月には「今年の名士」に選ばれ、翌90年3月には同勲章を授与された。

ファゴット　馬込　勇

合唱指揮　佐藤　公孝

Program

『吹奏楽の源泉を訪ねて』Ⅵ ～ベートーヴェンの吹奏楽曲～

Marsch Nr.1 F-dur
"Für die böhmische Landwehr" WoO.18 ……L.v.Beethoven(1770～1827)
ボヘミア守備隊のための行進曲（ヨルク行進曲）
第１番　ヘ長調　WoO.18 L.v.ベートーヴェン

Polonaise D-dur WoO.21……L.v.Beethoven
ポロネーズ　ニ長調　WoO.21 L.v.ベートーヴェン

Marsch D-dur WoO.24……L.v.Beethoven
軍楽のための行進曲　ニ長調　WoO.24 L.v.ベートーヴェン

Konzert in 4 Teilen für Fagott und Orchester ……A.Scherbaum(1931～)
ファゴット協奏曲（日本初演） A.シェルバウム

Ⅰ. Lento
Ⅱ. Presto
Ⅲ. frei) ruhig schreifend
Ⅳ. Lento-Presto

The Sword and the Crown ……E.Gregson(1945～)
剣　と　王　冠 E.グレグソン

▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀ 休　　憩 ▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀▶◀

Prélude à l'après-midi d'un faune……C.Debussy(1862～1918)
(Arr.by Gemba Fujita)
牧神の午後への前奏曲 C.ドビュッシー
(編曲　藤田玄播)

Nocturnes ……C.Debussy
(Arr.by Gemba Fujita)
夜　想　曲 C.ドビュッシー
(編曲　藤田玄播)

Ⅰ. Nuages　雲
Ⅱ. Fêtes　祭り
Ⅲ. Sirènes　海の精（シレーヌ）

"Daphnis et Chloé" suite, no.2 ……M.Ravel(1875～1937)
(Arr.by Gemba Fujita)
舞踊音楽「ダフニスとクロエ」第二組曲 M.ラヴェル
(編曲　藤田玄播)

Ⅰ. Lever du jour　日の出
Ⅱ. Pantomime　パントマイム
Ⅲ. Danse générale　全員の踊り

ベートーヴェンの吹奏楽曲 ―――――――― 吉成　順

『吹奏楽の源泉を訪ねて』Ⅵ

ベートーヴェンと吹奏楽。意外な結びつきだと思われるかもしれません。これがひと昔かふた昔くらい前なら、むしろそんなに意外でもなかったでしょう。《エグモント》をはじめとする序曲や交響曲の一部を吹奏楽に編曲して演奏することが、かつてはよく行われていたからです。しかし演奏効果の高いオリジナル曲が豊富に作られるようになり、またオーケストラ作品を編曲する場合でももっと新しくて華やかな曲が好まれるようになる、というような経緯の中で、ベートーヴェンは吹奏楽の領域からはどんどん遠い存在と思われるようになっていったようです。

しかし、どっこいベートーヴェンは吹奏楽と無縁ではないのです。しかも「編曲」という、いわば間接的な縁だけではありません。実はベートーヴェン自身の手になる、吹奏楽のためのオリジナル曲があるのです。しかも７曲も！　内訳は、やや規模の小さな行進曲が３つ、ポロネーズやエコセーズといった舞曲が３つ、そしてちょっと規模の大きな行進曲が１つ。ベートーヴェンの作品目録で、WoO.18～24という番号が与えられているのが、それです。

WoO.18～20の３つの行進曲とWoO.21～23の３つの舞曲は、いずれもほぼ同じ頃、1809年から1810年にかけて作られました。ベートーヴェンが40歳、交響曲なら第５番《運命》や第６番《田園》、ピアノ・ソナタなら《告別》などと同じ時期の作品ということになります。これらはベートーヴェンの支援者で弟子でもあったルドルフ大公の兄、アントン大公が率いるドイツ騎兵連隊の軍楽隊のために書かれたもので、軍隊の騎馬パレードや祝典演奏などの際に用いられたようです。楽器編成は、たとえば木管はピッコロ、フルートまたはオーボエ（当時は持ち替えが普通でした）２部、Ｆ管クラリネット、Ｃ管クラリネット２部、ファゴット２部、コントラファゴット、金管がホルンとトランペット各２部、それに小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバルなどの「トルコ風」打楽器が加わる、といったものでした。ほぼ20名前後の規模だったようです。

もう一つの行進曲WoO.24は、先の６曲より少し遅れて1816年に作られました。交響曲なら第８番と第９番のちょうど間、ソナタなら《ハンマークラヴィア》などと同じ時期です。こちらはウィーン市民砲兵旅団のパレードのために依嘱されたものですが、曲の規模は先の６曲よりも格段に大きくなっています。長さも倍以上、楽器編成も、先ほどの各パートがそれぞれほぼ倍以上に拡大されているのに加えて、トロンボーンやセルパンといった低音金管楽器が増強されています。当時の軍楽隊の標準的な人数はほぼ30～40人程度であり、この曲の編成もそれに見合うものではありますが、音楽そのものの派手さを考えると、実際の演奏人員はもっと多かったかもしれません。

モーツァルトやハイドンの頃の吹奏楽は、「ハルモニームジーク」と呼ばれる８人から10人程度の合奏が主体でした。ベートーヴェンも20歳代の若い頃には、そういう編成の曲を書いています。その後、ほんの20年間ほどの間に、吹奏楽の規模はここまで拡大したのです。金管楽器にバルブがついたり、サクソフォーンが発明されたりするのはまだ先の話ですが、近代的な吹奏楽の下地は既にできつつありました。ベートーヴェンの吹奏楽作品は、急速に発展しながら新しい姿を確立しようとする、当時の吹奏楽というジャンルの勢いを、そのまま反映しているのです。

曲目解説 ―――――――――――――― 藤田玄播

ファゴット協奏曲

A．シェルバウム

A．シェルバウムは生粋のウィーン子で、ウィーンで育ちウィーン国立音楽芸術大学（旧ウィーン・アカデミー）でフルートを学び、ウィーン・フィルのニダーマイヤーとレズニチェック両教授に師事し、作曲を高名なアルフレッド・ウール教授に学びました。

はじめはウィーン・オペラの第１フルート奏者をつとめた後、1952年からリンツ州のブルックナー管弦楽団の主席フルート奏者就任し、現在に至っています。

作曲家としての活動は、早くからORFオーストリア国営放送、ドイツ放送から多くの依頼を受け、室内楽から交響曲にわたる作品を残しています。この中で代表的な作品である管弦楽曲もヨーロッパ国外で多く取り上げられています。

日本ではコレギウム・ムジクムやヴァイオリン奏者の小林武史氏が多くの初演をし、好評を博しています。

このファゴット協奏曲は、ブルックナー管弦楽団からの委嘱により、同楽団の主席ファゴット奏者、馬込　勇氏のために作曲され、1994年12月６日ブルックナー・ハウスの大ホールにおいて、ロマン・ツァイリンガーの指揮で世界初演が行われました。今日は日本での初演となります。

曲は、緩－急－緩－急という四つの短い部分で構成されていて、作風はウィーンの12音音楽技法を用いて、ジャズ風に仕立ててあります。オーケストラはユーホニウムを除いた金管楽器と様々な打楽器を用いて、それにビブラホーンにハープ・ピアノとコントラバスが加わります。

第一部分　４分の４拍子　レント

冒頭は六小節間が弱奏で提示され、これがブロックのＡとしてファゴットの伴奏型として何度も使われています。ファゴット・ソロがカデンツァ風なフレーズを弱奏して、次の部分へ入ります。

第二部分　２分の２拍子　プレスト

ティンパニと太鼓の類のリズムに乗ってファゴットが跳躍の激しいフレーズを吹き出します。終わりにカデンツァが自由な表現によって歌われます。

第三部分　４分の６拍子　自由に

コントラバスがピッチカートで基本となるリズムを刻み、シンコペーションを多用した高低差のあるフレーズを吹きます。最後は、ビブラホーンとソロ・ファゴットがカデンツァ風な二重奏をして終わります。

第四部分　８分の８拍子　プレスト

はじめは第三部分の音楽を引きずっていますが、突然最強奏になりテンポが早まってプレストに入ります。作曲家はもっと早いテンポを想定しているようです。この部分は高い音を吹いていて、まるでフルートの曲のような錯

覚にとらわれます。超絶技巧を駆使したファゴットのパッセージは、楽器法ではファゴットの音域外の最高音「一点ト音」まで駆け登り、クライマックスを築き最後は最低音の「ロ音」を吹きのばして終わります。

剣　と　王　冠

E．グレグソン

E．グレグソンはイギリスでもっとも多彩な活動をしている作曲家の一人といわれています。作品はオーケストラ、器楽曲、室内楽、合唱曲などのほかに、演劇、映画、テレビなどの作曲もしています。

この他、ゴールドスミス音楽大学の指導者でもあり、ロンドン王立音楽院の作曲科の教授も兼務しています。

この作品は、1988年に王立シェクスピア劇場の音楽を任され、イギリスを統治していた12世紀以降の王・ヘンリーⅤ世の死からリチャードⅢ世の死までを題材にした、三部作の劇のための音楽を作曲することがきっかけになりました。

女王陛下のバンドである王立空軍バンドが、1991年にイギリス国内の演奏旅行する際に、この三部作の中から作曲家自身が抜粋して、三つの楽章からなる組曲としてバンド用に編曲したものです。

第一楽章　神秘的に

オフ・ステージでトランペットのファンファーレが鳴り響くと、男声合唱がラテン語で「レクイエム　エテルナム」と歌い出します。この部分はヘンリーⅤ世の劇からのものです。曲が盛り上がって次は行進曲風になります。ここはイギリス軍隊がフランスへ進行する有様を描いています。これがフランス軍の勝利の行進曲にかわり、イギリスのマーチはカウンター・メロディーとして現われます。これが静まって、再びファンファーレが現われて、そのまま第二楽章に入ります。

第二楽章はウェールズの宮廷にいるヘンリーⅣ世の劇中音楽です。全体に静かな雰囲気を持っています。ブリッジの打楽器群の自由で拍節のない部分がおさまると、打楽器の優しい伴奏にのって、アルト・フルートがソロで民謡風のメロディーを三回変奏風に吹き続けます。最後は打楽器群とアルト・フルートで締めくくり、そのまま第三楽章へ入ります。

第三楽章は２台のティンパニの掛け合いで始まり、高低一対のトム・トムの掛け合いにバス・ドラムや銅鑼も加わり、野蛮な戦争を象徴的に表しています。オフ・ステージのファンファーレ隊と舞台上のトランペットが掛け合い、続いてこれがホルンに移ります。この二つのファンファーレは、ヘンリーⅣ世が反乱部隊との戦いで勝利を収めた賛歌が用いられています。最後はトゥッティで賛歌を歌い上げて終わります。（演奏時間　約15分）

牧神の午後への前奏曲

C.ドビュッシー

ドビュッシーは1880年に象徴派の詩人マラルメと知り合い、彼の主催する芸術家（主にボードレール、ヴェルレーヌなどの象徴派の詩人）の集いに音楽家としてただ一人出席していたと言われています。ドビュッシーは彼ら象徴派の唯美主義の手法を音楽に求めて、印象主義の作風を音楽に反映させたのでした。その後、マラルメの詩「まぼろし」による歌曲を作曲し、'92年にマラルメの詩「牧神の午後」の作曲に取りかかり、はじめの構想では「前奏曲、間奏曲、終曲（パラフレーズ）」の三つの楽章を想定していましたが、'94年に「前奏曲」を完成するとそれだけで彼は満足し「間奏曲、終曲」の２曲の作曲は取りやめてしまいました。

ドビュッシーはこの「牧神の午後への前奏曲」によって、自分の作風を完成させ、後続の作品「夜想曲」「海」「映像」などの印象主義の豊かな管弦楽曲を展開させていったのです。

印象派の画家達が時々刻々と移りゆく自然をキャンバスに描いていくように、絶えず変化していく自然を管弦楽の技術を駆使し、音楽に時間と運動、色彩を表現していったのです。

演奏時間にして８分足らずの小品ですが、以上のような管弦楽法が余すことなく発揮されています。

初演の時のプログラムに彼自身は次のように書いています。

《前奏曲の音楽は、マラルメの美しい詩の非常に自由な挿画です。この音楽は詩を総合しようとしたものではありません。この作品は連続する装飾であり、そこで牧神の欲望と夢が午後の暑さの中で動いていくのです。それから妖精達と水の精たちがおずおずと逃げるのを追うのにに飽きて、牧神はついに実現される夢、自然界をすべて手中に収めるという夢に満たされて、酔い心地のまどろみに身を任せます。》

曲は、第一部の提示部、第二部の展開部、第三部の再現部の大きく三つに分けられています。

第一部　トレ・モデレ　８分の９拍子　ホ調

フルートが葦笛を模した官能的なメロディーを提示し、繰り返しながら次第に高まっていきます。

第二部

一度高まった曲が静まると、変ニ長調４分の３拍子になり、この曲の中で唯一音楽的に整理されたメロディーです。妖精達の幻想とともに、官能の甘い悦びを感じる主題が奏でられます。

第三部

最初にフルートの主題が再現されますが、４分の４拍子に拍子が変わり、ハープのアルペッジョにのり三度高いホ長調の主題になります。これが変ホ長調になるとオーボエが、引き延ばされた主題を歌った後、葦笛の主題が吹かれて牧神の幻の夢も消えていきます。最後にホルンによる和音が幻想的に

現われると、牧神はまどろみにはいっていきます。この編曲は1971年に行いましたが、これをさかのぼること10年前の1961年に、ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団が初来日した折に、この作品をデュポン編曲で聞いたことがきっかけとなっています。

夜　想　曲

C.ドビュッシー

「牧神の午後」が1892年に完成し1894年に初演された頃に、この「夜想曲」は着想されていました。1899年に全曲が完成し、初演は1901年10月コンセール・ラムールにおいて行われました。「牧神の午後」に匹敵するほどの好評を博し、これによって彼は「印象主義」という作風を完成させたのです。

曲は「雲」「祭り」「海の精（シレーヌ）」の三曲で構成されています。この作品の着想当時は「黄昏（たそがれ）の３つの情景」という標題を持つ作品であり、第一曲が弦楽合奏、第二曲が管楽合奏、第三曲が管弦楽曲、という構成であったと言われています。

初演のプログラムに彼自身の解説がありますので、それを各楽章についてのせておきます。

《「夜想曲」という題は、ここではごく一般的な、特に装飾的な意味で使われている。だからここで問題なのは、夜想曲という通常的な形式ではなく、この言葉に含まれている特殊な印象と光である。》

第一曲　「雲」４分の６拍子　ロ短調

《「雲」それは空の不変の姿と、そこをゆっくりと厳かに流れる雲の動きを描写した、ほのかに白みがかかった雲は、どんよりとした灰色の中に消えていく。》

第二曲　「祭り」４分の４拍子　ヘ短調

《不意にまばゆい光がきらめく雰囲気の中で、揺れ動き踊りたつリズムだ。又それは、祭りの渦の中に突入し、そのままとけ込んでゆく行列のエピソード（まぶしい幻想的な夢）でもある。しかし背景はあくまでも変わらない。祭りは秩序正しいリズムにのせられて、きららに光る塵と音とを混ぜ合わせ、一体となる。》

第三曲　「海の精（シレーヌ）」12分の８拍子

《海とその数限りないリズムを表す。やがて月の光に照らされて銀色に光る波間に、海の精たちの神秘な歌声（女声合唱）が聞こえ、笑いさざめき、通り過ぎていく。》

舞踊音楽「ダフニスとクロエ」第二組曲

M.ラヴェル

管弦楽の魔術師といわれるラヴェルの作品には、「ボレロ」をはじめとした多くの名曲が残されています。中でも「ダフニスとクロエ」は、ラヴェル

の卓越した管弦楽法と楽器法は、彼の音響への繊細な心づかいによって作り出される音色的効果、こうした配慮が彼の香り高い音楽性を花開かせているといえます。ラヴェルの音色、ソノリティによって、しばしばドビュッシーの確立した印象主義音楽の後継者と言われますが、技法やその音楽の本質的な美学の上では、互いにはっきりと異なっています。

ラヴェルは、音楽の構造や形式は線的で明確であり、旋律の線はドビュッシーの輪郭のぼけたそれとは異なり、きりっとした輪郭を持っています。リズムには秩序があり、特にこのバレエ曲の終幕「全員の踊り」に典型的な姿で現れてきます。

初演は1912年６月ピエール･モントウの指揮で、シャトレ劇場で行われました。吹奏楽編曲にはさすがフランスが多く、歴代ギャルドの楽長のデュポンやブランなどが行っていますが、日本ではこの編曲が初めてです。初演は本学ブラスオルケスターの第16回定期演奏会で、大橋幸夫先生の指揮で行われました。東京文化会館の会場を興奮の渦に巻き込んだことを、鮮明に記憶しています。ブートゥリ先生とは二度の協演をしています。

これがきっかけになって、日本中のアマチュア・バンドが競ってこの曲を採り上げ演奏をしていますが、50名足らずのバンドで、しかもコーラスが入っていない状態では、ラヴェルの音楽を忠実に再現できないことは明らかです。

バレエの筋書きは、古代ギリシアの田園詩に着想されたもので、「羊飼いの息子ダフニスと恋人クロエの無邪気で牧歌的な恋愛を中心にして物語を進めていきます。」

第一曲　「日の出」

夜が輝かしい暁に徐々に変わってゆき、小鳥のさえずりが夜明けをしらせます。遠く牧人達が笛を吹きながら通り過ぎていきます。羊飼達が寝ているダフニスを起こし、略奪されたクロエがパンの神に助けられたことをダフニスに告げ、現れたクロエは彼の胸の中に身を投げかけます。

ついに昇る太陽のバラ色の輝きが一段とましたところで、曲はさらに盛り上がり、太陽はまばゆい輝きを放ちます。

第二曲　「パントマイム」

老牧人ランモンは、パンの神がクロエを救ったのは、かつてこの神が愛した妖精のシリンクスの思い出があったからだと説明する。ダフニスとクロエはパンとシリンクスの恋物語を身振りで演じます。フルートのメランコリックなソロがしばらく続いた後、曲は次第に活気を帯びて、歓喜の騒ぎへと入っていきます。

第三曲　「全員の踊り」

急速な４分の５拍子の踊りになり、若い娘達と男達の爆発するような歓喜の大騒ぎになります。リズムとダイナミックスの変化に富んだ豊かな楽器法を駆使して、曲は最高潮に達して終わります。

本日はお忙しい中、御来場頂きまして、誠にありがとうございます。

今回は、本学の創立70周年記念の最後の催しとして、パリ・ギャルド吹奏楽団の指揮者でいらっしゃるロジェ・ブートゥリ先生をお迎えして、ドビュッシー、ラヴェルとフランスのエスプリ薫るプログラムでお聴き頂きますが、今回のこのチャンスを我々のものとし、皆様に御満足頂ける演奏を目指して努力してまいりました。七夕の午後のひとときをお楽しみ頂ければ幸いです。

最後に、今日の為に御指導下さいました大阪先生、中村先生、並びにこの様に素晴らしい機会を与えて下さいました、大学関係各位に厚く御礼申し上げます。

1996年　七夕　＜インスペクター＞

後期定期演奏会スケジュール

日　時	内　容	会　場
10月19日(土) P.M.4：30	第27回 打楽器アンサンブル定期演奏会	講堂大ホール
10月27日(日) P.M.4：00	第50回 ソロ・室内楽定期演奏会	津田ホール
11月13日(水) P.M.6：30	第15回 作曲学科定期演奏会	講堂小ホール
11月22日(金) P.M.6：00	第26回 合唱の夕べ	講堂大ホール
11月30日(土) P.M.4：00	第86回 オーケストラ定期演奏会	講堂大ホール
12月 7日(土) P.M.4：00	第25回 シンフォニックウインドアンサンブル定期演奏会	講堂大ホール
平成9年 3月17日(月) 18日(火) P.M.1：00 5：00	卒業演奏会	講堂大ホール

国立音楽大学ブラスオルケスター

Conductor 大阪泰久・中村ユリ

Concertmaster
神田将吾

Piccolo
長谷場純一
落合朝子

Flute
柳楽智史
瀧大輔
薄田真希
大須賀淳子
小林優香
田代あい
西巻有希子
杉山真穂
成清愛
船津佳恵
本間恵理子
溝口綾

Alto Flute
黒川美保子
西巻有希子
芳賀文恵

Oboe
森裕時
金子優子
筒井あや
野津晴美
石井由紀
小山悦子
沼佳名子

English Horn
森裕時
筒井あや
野津晴美
進史絵

A♭ Clarinet
浅見香

E♭ Clarinet
牛尾涼子
浅見香

D Clarinet
中里真也
浅見香

B♭ Clarinet
神田将吾
中里真也
阿部洋子
酒見朗子
春沢真由美
松本八重
渡部泰子
里山陽子
藪原信子
渡邊友貴
小笠原賢二
川村慎敬
浅見香
梅林香織
加藤純子
日下部恵子
横山絵里
渡辺あい子
新井郁子
黒岩真美
高橋はるか
富樫愛子
土肥朝子
中島香織
林裕子
山口えつ子
横山佳奈

Solo Clarinet
酒見朗子
渡邊友貴

Alto Clarinet
今徳百重
膝館真由佳
梅林香織

Bass Clarinet
藤原稔文
浅川奈津子
川村慎敬
松本幸恵

Contra Alto Clarinet
小笠原賢二
植竹友和

Contra Bass Clarinet
澤井健一郎
木原亜土

Soprano Saxophone
広川健司

Alto Saxophone
飯室志津香
入江美加
大森史子
齋藤純子
岩崎乃理子
樋口三重

Tenor Saxophone
福住拓朗
矢邉新太郎
井本沢美
松本美和子

Baritone Saxophone
小林通宏
河村秀教

Bass Saxophone
鈴木禎

Bassoon
川田徹哉
外山二奈子
森田信子
高林恵理子
見村嘉美

Double Bassoon
大場貴央

Horn
猪俣和也
上田貴子
山下美貴子
吉田彩子
吉田孝志
佐沼美千代
渋井満
関谷智洋
五十川陽子

Trumpet
兼川彌内
服部正
正來孝之
松本大介
松本典剛
渡辺明好
谷川美和
石井慎太郎
北原毅
進藤亮
村松匡

Trombone
岡田一志
鎌田聡
佐伯正則
宮崎円
伊能広胤
柁原豊
渡辺善行

Bass Trombone
中川順博
広瀬信一
吉原智美

Euphonium
石塚崇
西平毅
会田智穂
橋口知加子

竹下知樹
望月友美

Tuba
小倉吉裕
池田幸広
本間雅智
佐藤和彦
中野弘之
細谷悦子

Percussion
堀　正明
平　浩子
山崎美代子
奥田真広
永井健一
川田絵里子
山本晶子
高橋克弥
淺田佳奈子

大橋恵里
戸田美紀
渡部朋美

String Bass
北澤大輔
山西貴久
土肥恵利子(賛助)
松野　茂(教員)

Harp
朴　瞬亜
佐藤かをり

Piano
畠山泰孝

Organ
菅　哲也(教員)

インスペクター	鈴木　禎	柁原　豊		
スタッフ	小林　通宏	会田　智穂		
ライブラリアン	渡辺　善行	里山　陽子	高林恵理子	山本　晶子
	船津　佳恵	本間恵理子	渋井　満	高橋　英樹
	豊田　聖治	宮内　知代	松本　幸恵	鈴木麻記子
	吉野由紀子	刀根　良子	野村　理代	山里佐知子
セッティング	竹下　知樹	中村　匠	山内　博史	加藤　由記
	近藤　恵美	白畑　暢子	竹村　佳世	荻　恵美
	植竹　友和	木原　亜土	高橋はるか	林　裕子
	山口えつ子	横山　佳奈	大郷　良知	堤　祐介
	小林　翼	宮本　岳人	中野　勇介	三須　健至
	辻井　立野	大野　義政	山科　綾	
会計係	井本　沢美	吉原　智美		
楽器係	伊能　広胤	奥秋　剛	前田　尚基	吉田さち子
	大西　貴子	小田　良子	尾兼　美保	黒岩　真美
	澤田　陽子	富樫　愛子	中島　香織	池田　努
	門脇　哲郎	大郷　良知	星野　杏奈	桑野友香子
	佐藤　昌子	蛭間奈津子	岩切　理恵	大藤　洋子
	山里佐知子	山科　綾		
音響係	柁原　豊	樋口　三重	似内　秀樹	坂東　邦宣
	吉田　江利	門脇　哲郎	岩切　理恵	大藤　洋子
広報係	広瀬　信一	膝館真由佳	島崎さや香	矢野さや香
	牛尾　涼子	北嶋　寿恵	浮谷　沙代	吉田　江利
	細谷　悦子	土肥　朝子	新井　郁子	宮本　岳人
	荻原　由美	桑野友香子		

合　唱

Soprano Ⅰ

秋田香織
朝比奈貴子
五十嵐暁子
乾園子
梅山杏子
江間利枝
大場吏佐子
奥田久美子
小田切一恵
木幡和子
佐藤悠子
嶋田恭子
鈴木文
田中杏子
富森枝里子
中野美和子
中村志穂
芳賀みのり
原田敬子
平川千志保
星子みほ
細矢愛
松村朋子
宮原祐子
森川泉
淺野多恵子

Soprano Ⅱ

秋山展子
遊田さつき
井出雪子
井上愛子
潮歩
江原あづさ
遠藤珠生
大薗麻美子
神田麻里子
草野めぐみ
小原あき
小林悠貴
神門愛
佐々木慶子
佐々木庸子
瀧川沙織
瀧澤京子
中村文香
長川恵理子
半蔀奈緒子
前坂美貴
増田可愛
宮窪百合
宮田美保
森谷麻友子
吉野恵美
渡辺ゆき

Alto Ⅰ

石場美紀子
板垣貴子
岩知道恭子
岩村悠子
上野真紀
大畑純子
大矢由利子
岡本知高
小黒香
川島亜希子
児玉奈都子
小山幸恵
坂本美香
笹原郁子
杉森綾乃
高橋里佳
武居暢子
廣田みのり
増井かおり
松谷さよ子
松本順子
山下千夏
山梨麻衣
藪田瑞穂

Alto Ⅱ

磯部真樹子
岩月百合
内田寛子
大西晶子
河野容子
菊池万希子
桜庭章子
清水華澄
新城美穂
田川理穂
冨山美穂
仲野真希
永井利香
長谷川紗織
浜田礼子
平舘直子
平塚真樹子
平間麗華
二渡加津子
文屋小百合
水野裕子
山根千佳

Tenore Ⅰ

村上宣也
池田貴宗
大堂佳晃
郷恭博
佐藤秀
白井名留
清造暁彦
谷口洋介
前田真一
松岡恒
沖野孝頼
常光幸雄
洞口圭

Tenore Ⅱ

鎌崎東
中嶋誠
石橋厳徳
小津準策
四宮貴久
志村糧一
住博海
関矢基博
古井孝

Basso Ⅰ

戎谷敦
笠原壮史
梶原秀貴
神林竜平
長野圭信
照屋睦
戸塚健太郎
林泰寛
桝重義之
小林壮一
高田智宏
千浦名生
仲澤和駒
藤森潤

Basso Ⅱ

加山忠則
柴尾享志
龍進一郎
渡邉寛智
大野稔明
香川真之
北川辰彦
佐藤義幸
相馬純
名倉和孝

国立音楽大学

シンフォニック ウインド アンサンブル
第25回　定期演奏会

客演指揮：今　村　　能
指　　揮：中　村　ユ　リ
演　　奏：国立音楽大学シンフォニック ウインド アンサンブル

吹奏楽のための序曲 …… 間宮　芳生
シンフォニア …… 木下　牧子
交響詩オンリー・ワン・アース …… 斉藤　高順
吹奏楽のための叙情的“祭” …… 伊藤　康英
吹奏楽のためのカタストロフィー …… 保科　　洋
シグナルズ・フロム・ヘヴン …… 武満　　徹
ガーデン・レイン …… 武満　　徹
ヴァリエーションズ …… 細川　俊夫
風　の　詩 …… 後藤　　洋
スターズ・アトランピック96 …… 三善　　晃

12月7日(土) 午後4：00
国立音楽大学講堂大ホール
全席自由　８００円

主　催：国立音楽大学
問い合わせ：☎0425－35－9535 演奏課

音楽の森

音楽を愛する心を大切に

国立楽器

北口本店 〒186 東京都国立市北1-4-3

Phone 0425-73-1111